My Favorite in Harp 's song

ハープ　私の1曲

第8回　ハープ奏者／講師
石﨑 菜々『ピエルネ：アンプロンプチュ・カプリス』

「門前の小僧習わぬ経を詠む」とはよく言ったもので、やはり達人の傍に四六時中居れば、子供でも御経を諳んじるようになってしまう。それほど何かを習熟する際の環境は、何事においても大切ということだろうが、お母様の石﨑千枝子と共に親子でハーピスト／講師である石﨑菜々の場合、物心ついてからハープが身近にあり、良い見本が常に傍にいたのだから、ハープを弾くことはごく自然な流れだったのだろう。ご自身も語るように、むしろ体育会系よろしく、部活もこなす、ハープ一辺倒の青春ではなかったらしい。つまり、ハープが「弾けた」わけだ。しかし後に生業（なりわい）としてハープを「弾く」となると、話はそう簡単ではなかった。

19歳のとき、彼女はある種の壁にぶつかった。立ちはだかったのは、ピエルネの壁だった。フランス近代の名曲のひとつで、リリー・ラスキーヌの名演が有名な「アンプロンプチュ・カプリス」。ハープにフィットした曲想であり、印象主義派のピエルネの和声感覚が反映された、ハーピストなら一度は通る課題曲のはずだった。譜面を読んで、当然「弾けた」わけだが、彼女の最初の反応は「あれっ?」だったという。確かにこの曲、これだけ煌びやかな曲想で華やかさを感じる曲なのに、実際は湖上に浮かぶ白鳥のように、ペダルワークが結構きつい。だから素人の感覚からいえば、難しさを感じて当然と思うわけだが、この気付きこそ彼女の分岐点であった。つまり、「弾ける」ということと「弾く」ということは、似て非なるものであるという、いつもとは違った感覚を体感したことが、今日の石﨑菜々を形成したのだ。この曲を習得する過程で、本腰を入れて練習しないと自分のものにはできないと悟ったことで、表現者として一芸を極めるスタートラインに初めて立てたといえるのかもしれない。その後、元よりの素養に加えて猛練習を重ねたのだから、まさに「鬼に金棒」。今ではすっかり自家薬籠中のレパートリーになっており、コンサートでもよくこの曲を弾くのだという。

コロナウィルスに見舞われた今年の春先、銀座十字屋カルテットの一員として出演予定だったイベントを含め、全国的にそうであるようにすべての予定が霧散した際、彼女はモラトリアム状態をむしろ自分に向き合う良いチャンスと捉え、今まで履習してきた楽譜を引っ張り出して練習に没頭する日々を送っていたという。もちろん、ピエルネもその中に入っていたことは想像に難くない。傍目から見れば、このピエルネの壁は、天才肌の挫折・・・ということに過ぎないのかもしれないが、彼女がカバンから取り出したピエルネの楽譜は、明らかに使い込まれ、相当年季の入ったものだった。それを垣間見たとき、このハーピストの本質が透けて見えた。現状を正面から見据えて努力を惜しまない、自らの内観としっかり対峙できる人なのである。

EVENT SQUARE　イベント・スクエア

2021 4/10　14:00 Start
吉野直子ハープリサイタル
大阪府立中央図書館ライティホール
日本ハープ協会関西支部
(FAX：0798-74-7350 石井)

2021 1/23　14:00 Start
中井智弥（箏・二十五絃箏）＆堀米綾（ハープ）
～和と洋が織り成す絃の調べ～
逗子文化プラザなぎさホール
（☎046-870-6622）

情報寄稿先：harplife@ginzajujiya.com　発行人/倉田恭伸　編集人/森　泰義

嘱望された若き
ハーピストでもあった。

Happy

100th anniversary of VICTOR SALVI

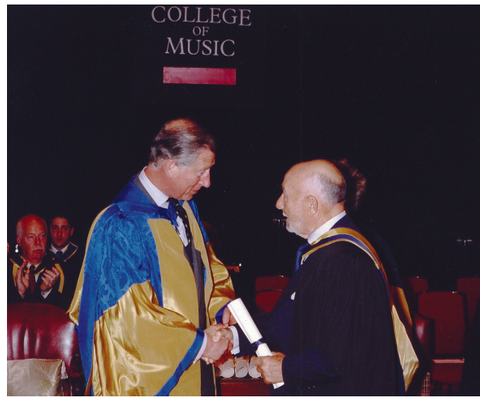
ハープと共に生きて
～ヴィクトール・サルヴィ生誕100周年の軌跡～

今年は、サルヴィハープの創立者ヴィクトール・サルヴィの生誕100周年に当たる。
そこで本誌は、今まで門外不出であった秘蔵写真の数々と共に、
その栄光の生涯を辿った。

Life with the HARP
VICTOR SALVI

ハープと共に生きて

右上：サルヴィ第1号機に着手したヴィクトール。
左下：イタリアへ。お茶目な表情も垣間見せた。
右小上：社会主義圏だったソ連にもハープを持ち込む、そのたくましい商魂!
右小下：英国王立音楽大学の名誉章を、チャールス皇太子より授与されるヴィクトール。



Happy 100th anniversary of VICTOR SALVI

リリー・ラスキーヌ（中央）と歓談するヴィクトール

考えてみてほしい。もしも、あなたが大好きで仕方ないことがあったとする。だが実地経験も乏しいのに、現状を捨て、その夢の実現のためだけに外国へ渡航できるだろうか。

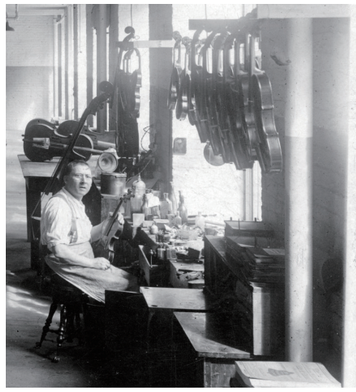
サルヴィハープを一代で築き上げ、世界一のハープメーカーに昇り詰めた男ヴィクトール・サルヴィが、今年生誕100周年を迎えた。イタリア移民としてアメリカ・シカゴに生を受けた彼は、楽器職人であった父、当代随一と謳われた兄アルバート、シカゴ・オペラハウスで教鞭を執っていた姉アイーダ同様、一家でハープを演奏していた。自身も才能をあのトスカニーニに認められ、NYフィルやNBCオーケストラなどで演奏しており、未来を嘱望されたハーピストだった。普通ならば、その流れに何の疑問もなく身を委ね、アメリカ屈指のハーピストでその一生を終えていたかもしれない。だが彼は、演奏家であると同時にメーカーになる大望も抱いた。それは傍目にはあまりにも無謀だった。彼はハープのメカニズムやより良い音創りにも興味を抱き、自前ハープの試作品を組み上げるまでになっていた。その“試作品”は、当時のどのハープより結果として凌駕していた。メーカーになる夢を実現するには徒手空拳だったが、ここからが早かった。その2年後の1957年、彼は

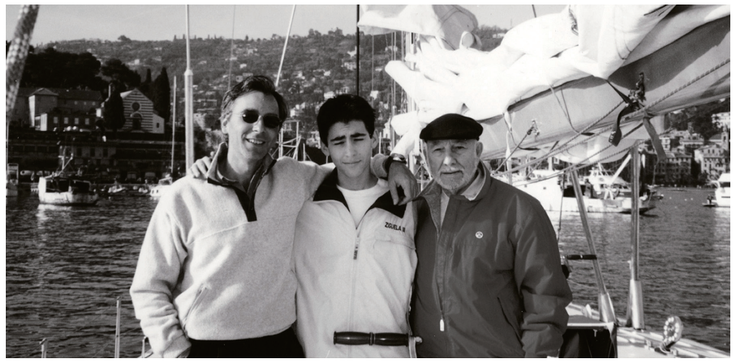
吉野直子とヴィクトール

すでにイタリア・ジェノヴァ近郊のヴィラ・マリアで、職人たちを集めてハープの工場を造っていたのだ。いくらイタリア移民の子だからといって、彼はアメリカ人だった。父の故郷とはいえ、イタリアはあくまでも異郷だった。しかも未来を約束されたハーピストの地位に恋々とせず、ハープ職人として再出発するあたりが、常人とはかけ離れたところだ。周囲の疑念など全く意に介さず、自らの夢を愚直に実現した男、それがヴィクトール・サルヴィというハープメーカーだった。

熱は人を惹きつける。「革新的なすごいハープができたぞ」‥そんな噂を聞きつけて、彼の工場には世界各地から人が訪れるようになった。評判と裏腹にだんだんと生産が追い付かなくなり、現在のサルヴィ工場のあるピアスコへ工場を移転した。中世から木材産業がさかんであり、ハープの命である木材を究めるためにも移転は一石二鳥だった。職人たちも集まり始めた。ヴィクトール自身、世界ビジネスが動く街シカゴの生まれだ。いくら評判がいいとはいえ、待っているだけの男ではない。「良質なハープとはこういうものだ」という想いを届けに、世界のコンクールを巡り、賞品としてハープを提供したり、鉄のカーテンを敷いていたソ連にまでハープを届けたりした。当代のハープの名手たちにも積極的に会い、助言を求めた。こうして試作品を完成したあの日から、少しも変わらないハープへの情熱を積み重ねていった結果、気が付くとかつては憧れたライオン＆ヒーリー社を傘下に置く、文字通り世界一のハープメーカーになっていた。彼の生き様は、まさに「一意専心」を地で往く人生だった。

ヴィクトールの生誕100周年に当たる今年、世界は未曽有のコロナ禍に見舞われ、サルヴィも少なからずその影響を受けた。その中であっても、昨年来取り組んでいる水溶性塗料に一新した環境コンシャスなハープ作り、エレクトリックハープへの傾倒、新たなレバーハープの制作などが、こんな最中でも形になってきている。それらは取りも直さず、最晩年まで現場に立ち、その時代時代で最善のハープを作り続けたヴィクトール精神の継承に他ならない。現在、二代目社長マルコ・サルヴィも、先代より業績を伸ばしていることから、至高のハープ作りのレガシーは今後も続いてゆくことだろう。





右上：ピエール・ジャメ（右）とヴィクトール。
中左：ヴィクトールの父ロドルフォ。米・イタリア系移民で、楽器職人として家族を支えた。
中右：現サルヴィ社長で実息のマルコと。
下：三代目のヴィットリオを囲むサルヴィ家三代。

【証言】

TESTIMONY

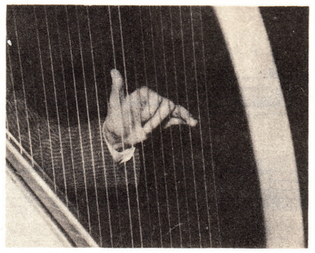
サルヴィで40年勤めあげ、今もサルヴィ博物館でハープの修繕に携わるアルド・ボーディーノ氏。「ヴィクトールがサルッツォ・ピアスコにやってきて、職人を募集しました。当時私は10年の年季がある家具屋でした。この地域は、木材を扱う非常に有能な労働力があった。最初は25人集まりました。木工装飾家、大工、家具屋、彫刻家。集まった連中は、理想のハープを創るため、切磋琢磨したものです。ハープの場合、サウンドボックスが命。それを支えるフレーム、支柱。理想に燃えた我々少年たちは、硬いカナダのカエデの柱、ストラディバリウスで定評のあったフィエンメ峡谷のアカトウヒの共鳴板、トレンティーノのブナを共鳴板の補強に使うという結論に達し、良いハープのあるべき姿へ邁進しました。彼は絶え間なく最高を求めていました。その後も研究開発部門に多くの投資をしました。現場優先で、妥協を許さない、職人と一緒になって汗をかく、堪えられない親方でしたね」。

KOJI AMADA Collection vol.10

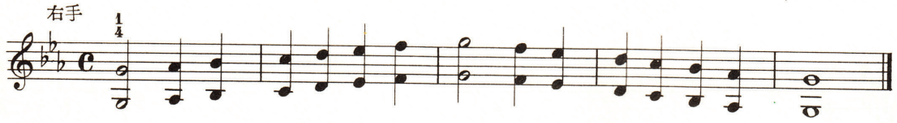
Point of PERFORMANCE

演奏のポイント

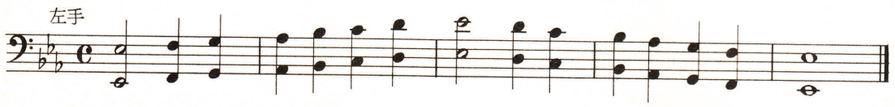
オクターブで上行する時の左手は、振動している下の音を4の指で消しながら次を準備しましょう。ワイヤー弦は雑音がなりやすいので、力のバランスは親指メインで。LESSON 9の「グリッセ」とは「スライド」を指します。4の指のスライドは、指を弦に対して90度に準備します。スライドした後に321を準備する方法でも問題ありません。



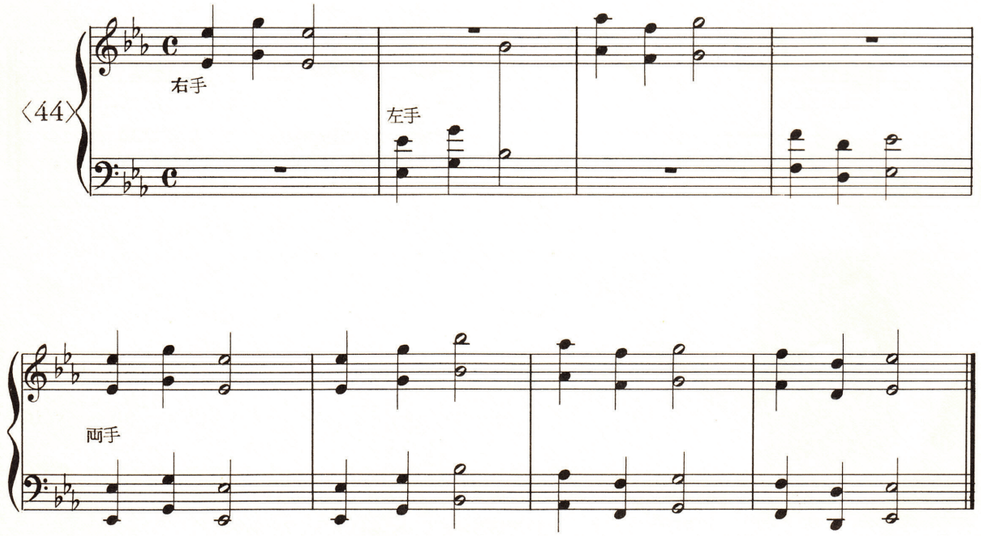
〈42〉 右手



〈43〉 左手

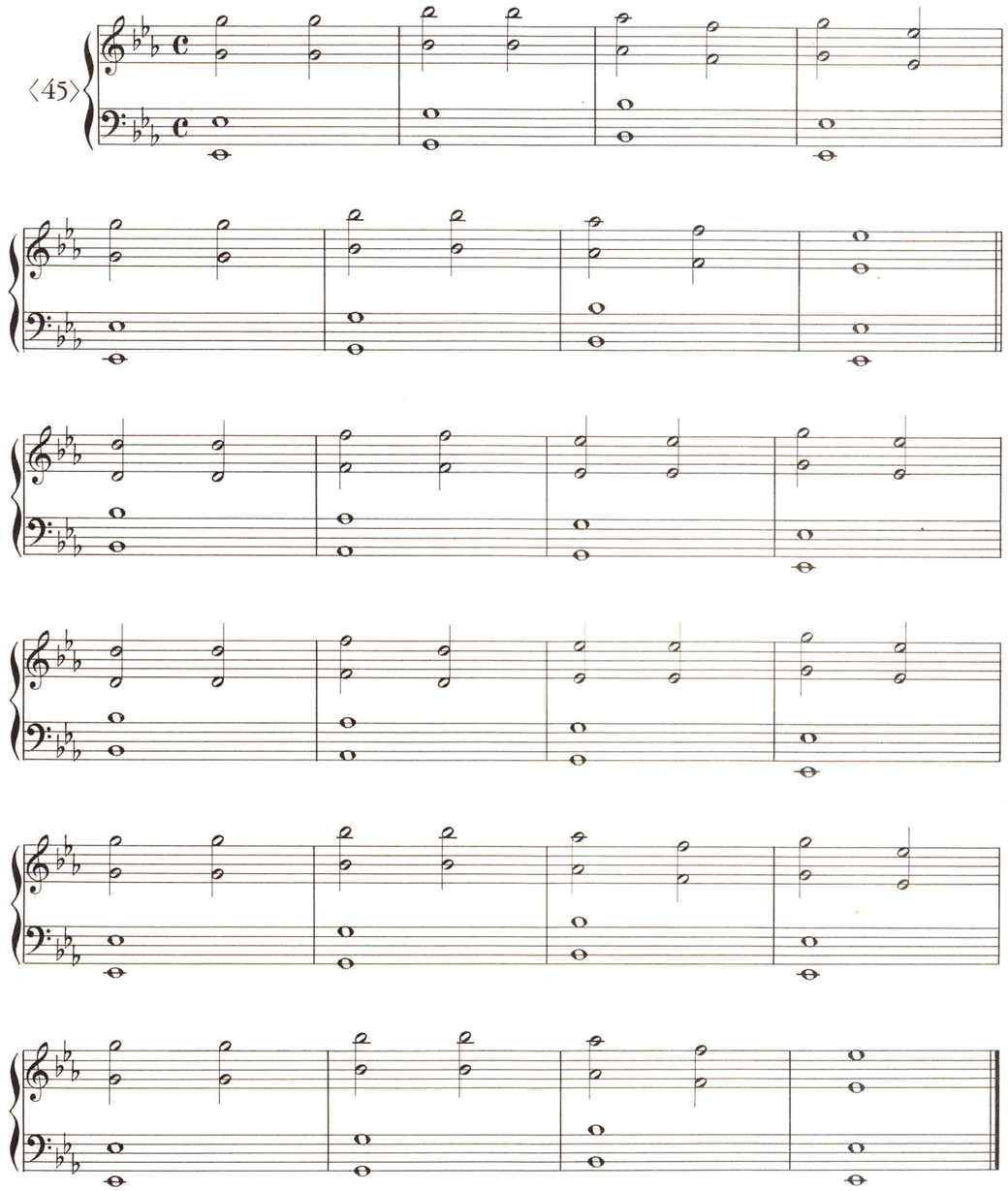


〈44〉 右手 左手



両手

〈45〉



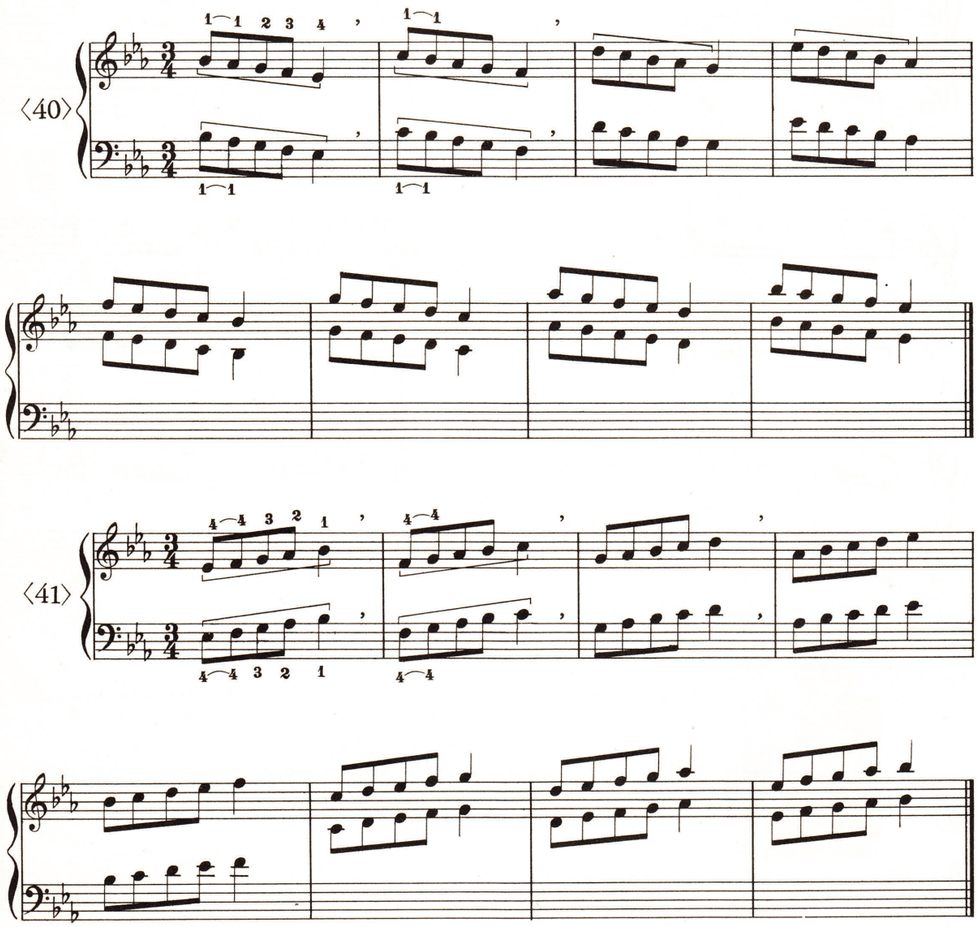
KOJI AMADA Collection

KOJI AMADA Collection vol.10

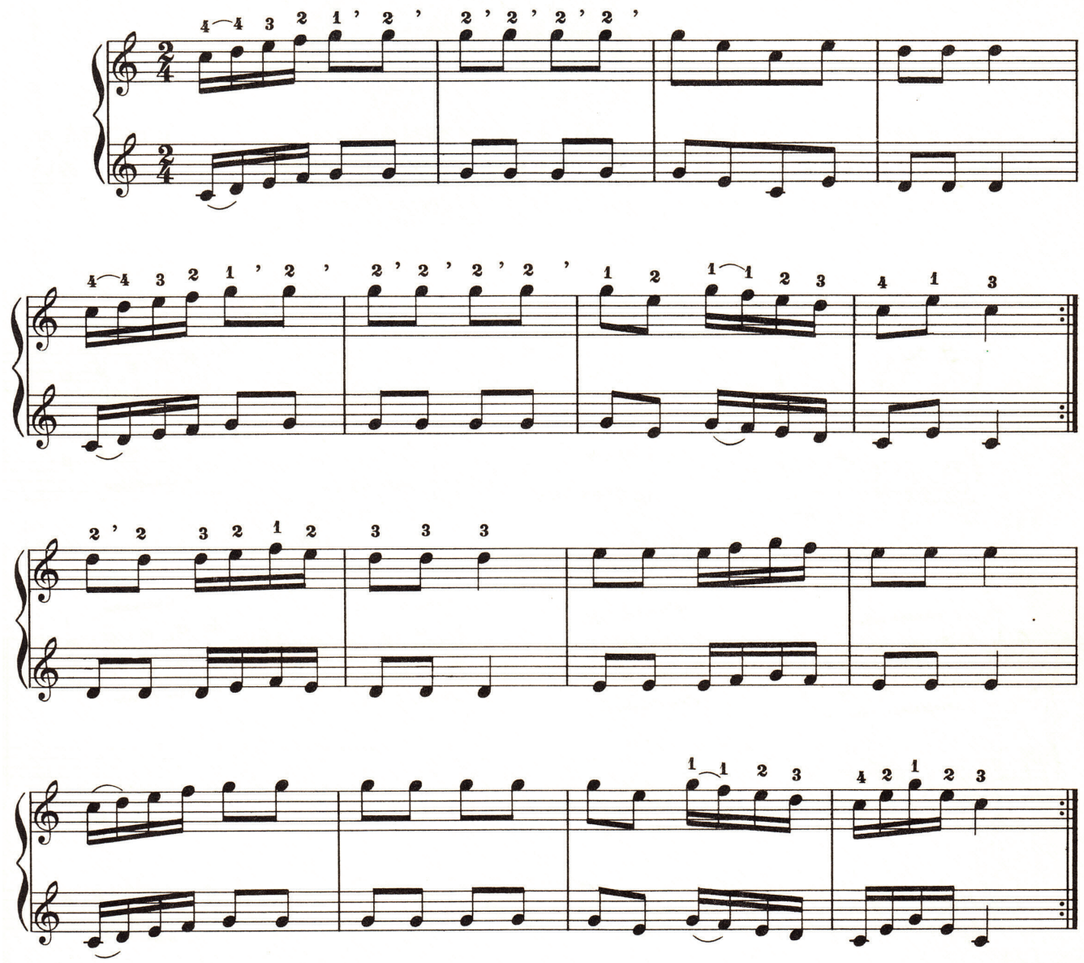
グリッセは，「すべらせる」という意味です。

第１小節目の音（**しらそふぁみ**）を１・２・３・４指でひきますが，（**し**）弦上に指をおいたら１指をすべらせて**し**音を出し，（**ら**）弦上へ落ち着かせます。**ら**（ト）　**そ**（2）　**ふぁ**（ト）　**みい**（3 ト）とひき進みますが，この時の手の形やひき方は，音階下行と同じです。

〈40〉



〈41〉



アイルランドでは珍しい姿勢でハープをひく。ハープには足をつけないで，底辺をそのまま体の右側の床におき，両足はそろえて左側の胴に添わせる。肩，両手の位置と運指はグランド・ハープと同じで，楽器全体が低いため，変音装置の手動鈎（Fook）が見やすいのがはなはだよろしい。ただし，おとなの場合は両ひざの間におくことも自由だという。

Harp Life CD Collection

ハープライフ選定 ハープ銘盤コレクション

時を超えて、いつまでも残しておきたい、
ハープの銘盤CDをご紹介してゆく
コーナーです。

Harp Life
GOLD DISC
第4回

「ニーノ・ロータ：ハープのための作品集／アンネレーン・レナエルツ」

その楽曲が、クラシックであると呼ばれる要素はいくつかあるが、まず風雪に耐える音楽であり、様々な角度から光を当てても燦然とその魅力を放つ音楽であると思う。現時点で、1900年前後のフランス近代印象派が人気を博しているということは、およそ100年という年月のフィルターに磨かれて、なおかつ当代向けのアレンジにもその魅力を失わないことが、クラシックたる条件なのかもしれない。

一方でその年月は、ここ50年に及ぶ映画というメディアとデジタル・インフラの出現により、次世代クラシックと呼べる楽曲を多く輩出するようになった。たとえば、ニーノ・ロータ、ジョン・ウィリアムス、エンニオ・モリコーネ、バーナード・ハーマン、武満徹、久石譲といった作家たちのように、すでに多くの交響楽団がレパートリーとしてその楽曲を常時演奏して好評を博す例は、クラシックと映画音楽の橋渡し的存在であり、今後多く演奏の機会が増える分野だろう。その最右翼であるニーノ・ロータは、そもそもクラシック畑の作曲家であったのが、フェデリコ・フェリーニ監督と出会い、彼の全作品を担当するようになり、映画「ゴッドファーザー」の大ヒットで世界的に名を馳せた。彼は「映画音楽として曲を書いている訳ではない」と主張した。逆に言えば、クラシック音楽を創るつもりでスコアを書き続けたわけで、クラシックより音数を減らし、しかも印象的で品の良いメロディの構築に腐心したと聞く。

印象的なメロディだが、一歩間違えると陳腐に聞こえてしまう。編曲にもよるのだろうが、演奏家の力量が問われるのも映画音楽の宿命でもある。アンネレーン・レナエルツが全編ニーノ・ロータ作品集を手掛けた時、正直危ない橋を渡った印象を受けた。「ゴッドファーザーのテーマ」「甘い生活」「ロミオとジュリエット」など、映画ファンならずとも耳タコの曲ばかり。だが下手すれば、オルゴールを聴いていたほうがマシと言われかねない。冒頭の「ハープと管弦楽のための協奏曲」も、耳心地の良い親しみを持った曲だが、ハーピストには容赦ないテクとオケとの親和性を要求される曲だ。ニーノ・ロータの作風は、感傷的で哀愁が漂い、独自のタイム感や揺らぎが生命線で、演奏家に一定の格調を求めながら情緒に深いアプローチも図らせるという、まさに演奏家泣かせの作曲家と言える。レナエルツは、見事にそのマリアージュを成功させた。普段はウィーン・フィルで主席ハーピストでありながら、客観的に見た際、鍵はオケとの一体感が握ると読み切り、敢えて故郷のブリュッセル・フィルと組んだ。それが奏功した。ハープが堂々とオケを従え、伴奏が出すぎることはなく、ここではディーヴァと化した彼女のハープが、実に誇らしく、情緒たっぷりに全編歌っている。「フルートとハープのためのソナタ」では、名手エマニュエル・パユがゲスト参加。より一層の彩を添えた。叙情性に長けた銘盤である。

お買い
求めは、
こちらから!

季節のおすすめハープ Vol.14

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープ。
今回は「タイタン」です。

培われ改良されてきた歴史をバックボーンにした安定度。

日本でもすっかりお馴染みになったファビウス・コンスタブルが、実は銀座十字屋におけるイベントで必ず指名してくるのが、この「タイタン」です。目下最新の「ウーナ」や、日本でも高い人気を誇る「ドネガル」を勧めても、彼は首を縦に振りません。理由を尋ねてみると、「ステージ映えがいいから」ということと、「楽器に安定感があるから」という反応が返ってきました。

確かに、まるで自らの意思を持つかのように、天へ向けて誇らしげにヘッドを貫くデザインは、美しく格好がいい。ステージでは聴かせるのみならず、見せる=魅せることにも重点を置くファビウスならば、さもありなんというチョイスなのですが、安定感という言葉が出たのは意外であったかもしれません。

しかし、実はファビウスの言葉は実に的を射たものなのです。タイタンは、38弦のフルレバーハープで、強固で軽いバーチ材を使用し、持ち運びが多いレバーハープで12.5kgという重さは、実に助かります。また、サルヴィのレバーハープのなかでも屈指のロングセラー・モデルでもあるため、培われ改良されてきた歴史をバックボーンにした安定度は、特筆されるべきもの。したがって、その外見に似合わず、初心者にも推奨できるスタンダードなモデルでもあります。室内移動の多い日本人にとって、38と弦数も多く、12.5kgの重さは、女性やティーンエイジャーたちへの運びやすさも考慮した楽器といえるでしょう。材質が硬めであることで、深く豊かでクリアなサウンドを生み出します。5オクターブを超えるフルサイズのレバーハープを必要とする方にも、最適な楽器です。また、さすがに38弦あると、音の厚みにも大きな影響を及ぼします。となると、イタリアで自身が率いるケルティックハープ・オーケストラを指揮しながら演奏し、楽団の音をリードするファビウスにとって、美観と抜群の安定感でタイタン一択にする意図も見えてくるのです。

TITAN
タイタン